

堀川城(気賀城)(市史跡)(浜松市北区細江町気賀字沖通り)

堀川城（ほりかわじょう）は、静岡県浜松市北区細江町気賀（遠江国引佐郡）にあった日本の城。奥浜名湖（細江湖）北岸に位置し、都田川河口の南側、満潮時には道が塞がる干潟の中にあったとされる。600mほど北に当時の主要街道である本坂通（姫街道）が通る。

城址は推定地とされ、都田川の流れも変わり河口の北側、田圃のなかに首塚のみ残る。

概要

永禄3年（1560年）、桶狭間の戦いにて今川義元が戦死した後、土地の人々が砦を築き、地名より堀川城と名付けた。ほど近い刑部にも刑部城を築き、徳川家康の遠江侵攻に備えた、と伝えられている。

正確な築城期は不明であるが、当時は今川氏の勢力下であった。

永禄11年（1568年）に、今川氏真から瀬戸方久に出した徳政令を免じる安堵状の中で、代わりに新城の備蓄を賄うように条件が付いており、この新城が刑部城・堀川城では、と見られている。

同年、徳川家康は本坂峠を越えて岡崎から湖北へ攻め込み、刑部城を落城させた。今川方で近隣の堀江城主大沢左衛門は家康に抵抗しており、大沢氏と連携した土豪の新田友作、尾藤主膳、山村修理らは、地元の農民など雑兵約1,700人を集めて気賀の堀川城に立て籠もった。

永禄12年（1569年）2月に掛川城を落とした家康は、同年3月27日、再び本坂峠を越えて堀川城を攻め、堀川城は徳川勢によって一方的に殺戮された。尾藤主膳は堀江城の大沢へ逃れたが切腹させられ、山村修理は本坂道を葭本まで逃れたが自害、新田友作は逃亡した。城兵は約半数が殺害され、半数が捕えられたが、家康は石川半三郎に命じて捕虜を皆殺しとし、約700人を女子供も含めて都田川の堤で全員首を刎ねた。新田はその後、葭本の金地院に戻り戦死者の菩提を弔っていたが、10年後に徳川方に見つかり、都田川の堤で処刑された。

城兵や新田友作が斬首された都田川の堤には、「獄門堰（なわて）」の名が残っており、三ヶ日一里塚近くの一里山の本坂通沿いには、自刃した山村修理の墓が残っている。

この戦いに参加した大久保彦左衛門が書いた三河物語には、「男女ともなで切りにぞしたりける」との記述が残っている。

瀬戸方久城主説

瀬戸方久が新田姓を名乗り、堀川城主をしていたという説が存在する。

瀬戸方久は瀬戸の姓を貰う前は松井姓を名乗っており、徳川家康の侵攻に際しては井伊氏とともに恭順しており、家康からも安堵状を得ている記録があるため、この説とはそぐわない。新田友作は、堀川城の戦い後の隠遁中に出家し「法休」を名乗っていたため、これを瀬戸「方久」と混同、同一視したものとみられる。

Wikipedia による

